

## 女性たちの保守運動との距離

宗教において女性差別が様々な形で見られる。その中で、なお女性たちが信仰を保ち続けているのはなぜだろうか。そのような女性差別的な要素を持つ、あるいは男性中心的な教団に、女性たちはなぜ留まり続けているのだろうか。このアポリアを解くために、近年の女性たちの「保守運動」を比較材料として参照してみよう。それらの保守運動は、一部の宗教とも担い手が重なり合うからである(鈴木2019)。

### 男女共同参画バックラッシュ

ところで、男女共同参画社会基本法では、1999年の成立当初より、女性の人權尊重というよりは、女性を日本の経済発展のためのコマとみなす新自由主義や少子化対策の意図が先行していたように思われる。そこでは、性別役割分担、女性の貧困や格差、DV、リプロダクティブヘルス・ライツ、といった重要な問題が二の次とされている印象が拭えず、したがってフェミニストといえども、同法に諸手を挙げて賛同しているわけではない。しかし同法やそれに基づく男女共同参画基本計画といった、ジェンダー平等に関するナショナル・マシーナリー(国内本部機構)は、全くないよりは不完全ながらもあった方がよいだろう。

一方、女性たちによる「保守運動」の矛先は、この男女共同参画社会基本法にも向けられた。そして同法の成立後も、それを骨抜きにしようと、各地で制定されつつあった男女共同参画条例への介入などが行われてきた。それにしても、男性ばかりか、他ならぬ女性たちもがジェンダー平等を掲げる同法を阻止しようとするのはなぜだろうか。

草の根の保守運動によるジェンダー・バックラッシュについては、すでに山口智美らの研究があるが(山口2012)、鈴木彩加は、近年の「保守運動」の中の、特に「主婦」や「女性」という主体に焦点をあて、質的分析を試みている(鈴木2019)。鈴木は考察範囲は、いわゆる「慰安婦」問題にも及ぶが、ここでは主婦による男女共同参画に対するバックラッシュのみ扱うこととする。

鈴木によれば、主婦が男女共同参画反対運動に参加することについて、先行研究ではおおよそ次の3つのモデルによって説明がなされてきたという。(1)伝統的保守主義モデル、(2)既得権益損失モデル、(3)新しい保守主義モデルである。

(1)では、日本会議などに典型的に見られるような、戦前の家族主義的国家観にもつながる、性別役割にもとづいた家父長制型家族が理想とされる。(2)では、性別役割分業を基盤とした社会構造のもとで、家事・育児・介護などのケア責任を女性に一義的に割り当てることから利益を得ている人々が想定されている。(3)は、「不安」によってバックラッシュへ接続していくというモデルである。長期不況による雇用の不安定化や新自由主義政策の推進による社会保障の切り捨てなどに起因する不安から目をそらすために、男女共同参画やフェミニズムを仮想敵にしているというわけである。

主婦による男女共同参画バックラッシュを説明する際には、(3)の新しい保守主義モデルが使用されることが多いという。既婚女性の多くが働くようになり、それまでの専業主婦としてのアイデンティティが傷つけられることに対する不安感や反感がそこには働いているとされる。しかし、漠然とした不安が、草の根のグループを立ち上げ、中・長期的に運動を継続してい

く原動力となり得るのかどうかと、鈴木は疑問を呈している。(1)と(2)についても、なお説明しきれない部分が残るという。

### 主婦バックラッシュと主流派バックラッシュ

そこで鈴木は、バックラッシュを担った保守系雑誌と反対運動に連なった保守運動団体の機関紙・会報・ミニコミの記事分析を通して、主婦たちの問題意識の解明を試みる。鈴木はその際、執筆者が「主婦」であることを自称している記事を「主婦バックラッシュ」と呼び、それ以外の記事を「主流派バックラッシュ」と呼び分けている。両者にとって「家族」が重要なキーワードとなっているが、家族の価値をめぐっては類似点とともに相違点が認められるという。

「主流派バックラッシュ」において「家族の絆」が強調される場合、家族は社会や国家の基盤として位置づけられている。基盤としての家族を解体する(かに見える)男女共同参画(や夫婦別姓)に彼らが反対するときも、主眼は家族の価値そのものの保持にではなく、あくまでも社会体制や国家秩序に置かれていると、鈴木は指摘する。

一方、「主婦バックラッシュ」は、具体的な家庭内での体験談という形をとり、非政治性が特徴となっている。そこでは、男女共同参画によって女性の社会進出と経済的自立が促されれば、愛情で結ばれ、支え合い助け合う家族の結びつきが弱まるとされ、家庭内の人間関係に対する脅威として男女共同参画が語られる。そして女性たちが家事・育児・介護を通して築き上げてきた、お互いを配慮しあう人間関係を維持することが一義的に重視されている。こうしてみると、社会や国家を論じるために家族に焦点化して男女共同参画を批判する主流派とは、力点の置かれ方が随分と異なることが窺える。

主流派の最終目標は基本法の廃止であるが、主婦たちが強く訴える、これまで行ってきた家事・育児・介護といったケアの意義と価値の社会的承認は、基本法の廃止だけでは達成し得ないものとなる。主流派における主婦像は「お気楽な身分」といったものであり、主婦の苦勞の内実は見過ごされている。したがって、両者の見解の相違は決定的であり、それは男女共同参画を批判するために持ち出されているはずの「家族の価値」という主張を瓦解させるほどの重要性を内包していると、鈴木は述べる。両者ともに、性別役割に基づく家族を推奨するが、それは表面的な共通点に過ぎないようである。

そもそもフェミニズムは、ケア領域そのものの意義と価値を認めている。しかし、その価値ある労働を「なぜ女性が主として行い、それへの待遇が劣悪(あるいは無償)なのか」を主題化してきたといえよう。主婦バックラッシュは、性別役割を肯定している点ではフェミニズムと袂を分かつが、鈴木も言及しているように、ケア領域の承認要請という点では、意外にもフェミニズムと近い距離にある。だとすれば、宗教に留まり続ける女性にもフェミニズムとの何らかの接点があるはずだ。一方で、宗教側にも女性たちの承認欲求に応え得るような教えの体系が用意されているものと推測される。

### [参考文献]

鈴木彩加『女性たちの保守運動』人文書院、2019年。

山口智美・斉藤正美・荻上チキ『社会運動の戸惑い』勁草書房、2012年。